Feature 特集

認知症ケアをアップデートしよう！

巻頭言……認知症をめぐる言葉と時代◆◆尾崎純郎……4
1……新時代をひらく認知症の人の支援◆◆梅本聡……6
2……BPSDって何だろう◆◆山中克夫……12
3……認知症について認知症の人から学ぶ◆◆稲田秀樹……17
4……地域とつながる 社会とつながる◆◆永島徹……23
5……家族が介護職に求めること◆◆早田雅美……30
COLUMN……認知症になっても人生は終わらない◆◆福田人志……28
COLUMN……MCIと早期発見◆◆中根一……36

Regular 連載

障害者をささえる現場から——あなたに会えてよかった◆◆北岡伸也……38

カイゴのチカラ Kaigonochikara
NO.126
2022年12月1日発行

CONTENTS

地域で生きる ともに生きる――地域における公益的な取組の位置づけ◆◆**菊地月香** …… 40
介護職が知っておきたい医学の知識――高齢者ではいつでも骨折に注意◆◆**堀田富士子** …… 42
にほんではたらく。外国人介護職リレーエッセイ◆◆**グエン ティ トゥイー チャン** …… 44
介護とシーティング――障害児・者支援におけるシーティングの意義◆◆**髙木憲司** …… 46
課題解決のための事例検討――排泄動作の自立支援◆◆**介護老人保健施設千の風・川崎** …… 48
活躍する介護福祉士さんに聞きました。◆◆**宮澤素子**さん …… 54
幸せの国 フィンランド便り◆◆**橋本ライヤ** …… 56
LIFE 高齢者介護における実践・活用の意義と課題――**LIFE**による「標準化」と「質の評価」◆◆**高野龍昭** …… 58
知っていますか？ 介護予防とフレイル対策――社会的フレイルとは◆◆**齋藤正洋** …… 62
F-SOAIP 介護記録にイノベーションを◆◆**島田朋子**／**嶌末憲子**／**小嶋章吾** …… 65
社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士都道府県別登録者数 …… 71
社会福祉振興・試験センターからのお知らせ …… 72
読者アンケート …… 76
バックナンバー …… 77

CONT

表紙**illustration**●横田ユキオ

特集

PART1●新時代をひらく認知症の人の支援
PART2●BPSDって何だろう
PART3●認知症について認知症の人から学ぶ
PART4●地域とつながる 社会とつながる
PART5●家族が介護職に求めること

アップデートしよう！

Dementia Care

巻頭言

認知症をめぐる言葉と時代

尾崎純郎●NPO法人認知症ラボ理事長

30年近く前、筆者は福祉系の出版社に入社し、編集者となった。福祉のことなど何一つ知らなかった私にとって、老人ホームは驚きの連続だった。そこにはたくさんの〝痴呆老人〟たちがいた。扉には鍵がかけられていたり、紐で縛られていたり、飲み薬をかき混ぜたご飯を食べさせられていたり。こうした光景と相まって衝撃的だったのが、そこで使われている数々の言葉だった。「収容」「処遇困難」「抑制」「脱園」等々。まるで刑務所で用いられるようなものばかり。

あれからずいぶん経った。「痴呆」は「認知症」へと名前を変えた。「問題行動」は「BPSD」とよばれる洒落た（？）用語に取って代わられた。昨今では、「尊厳」「QOL」「その人らしさ」「住み慣れた地域で」「パーソンセンタードケア」などの言葉もあふれている。このように用いられる言葉が変化したことは、とりもなおさず認知症に対する捉え方や認知症の人へのケアが大きく向上・進歩した証である。

ただ、まだまだ多くの残滓（ざんし）を見かける。誤解や偏見の温床となっ

FEATURE

認知症ケアを Update

ている言葉がある。たとえば「徘徊」。徘徊の意味は、「目的もなく、ふらふらと彷徨(さまよ)うこと」である。目的や目標、意図がないことを指すのだ。その意味で、認知症の人のそれは（達成できないとしても）目的があるのだから、徘徊とよぶのはふさわしくない。他にも、認知症への誤解・偏見を伴う言葉は数多くある。「暴力」「不穏」「帰宅願望」「介護拒否」「とりつくろい」……。認知症の人の行動は、なぜこうも《症状扱い》されなくてはならないのか疑問をもたずにはいられない。

私たちは、いつになったらこうした言葉を手放すことができるのだろうか——。今から20年後の西暦2042年を想像してみたいと思う。その時代に生きる（未来の）人たちは、過去（2022年）に「徘徊」や「暴力」といった言葉が使われていたことを知って、きっと苦笑することだろう。私は、言葉を扱う編集者として、未来人から後ろ指をさされないよう、今から慎重に言葉を使いたいと思う。

尾崎純郎 Ozaki Junro

1992年より専門出版社で、認知症や介護・福祉・看護・医療・老年心理学などの分野の書籍ならびに雑誌編集に携わってきた。これまでに手がけた作品は数百冊にのぼる。2012年より、NPO法人認知症ラボ理事長として、YouTubeチャンネル（認知症スタジアム）を運営している。他に、株式会社harunosora代表取締役、日本老年行動科学会常任理事など。2022年は、ケア業界に身を置いて、ちょうど30年に当たる。

特集◆認知症ケアをアップデートしよう！

PART 1

新時代をひらく 認知症の人の支援

一般社団法人千葉市認知症介護指導者の会会長
株式会社Qship代表
梅本聡 Umemoto Satoshi

「死んだ目」をしている認知症の人たち

廊下の片隅に息を潜め、肩を寄せ合うように集まっている4～5人の入居者。談話室に目を向けると、誰も真剣に見ていない大音響のテレビが点けっぱなしの中、テーブルに突っ伏しているしかやることがない人や、ボーッとしている人が多くいる。みな、認知症の状態にある人たちだ。どの人たちも、生気や活気といった「生」を感じさせるものが失われた「死んだ目」をしている。

そして入居者の周りでは、施設側が決めた一律のスケジュールに沿って介護職員がテキパキと動いていた。入居者に必要な日常生活行為のほとんどをお世話（介護）しているから、誰もが忙しい。

これは、約20年前に僕が勤めていた特別養護老人ホーム（以下「特養」）の日常の光景だ。

その特養でのある日のこと。

ジッとした入居者ばかりの談話室の中に、その日からショートステイを利用していた女性の姿があった。

彼女は自宅で一人暮らしをしていたが、収集日以外にゴミ出しをしたり、服薬や金銭の管理もできなくなってきたりなど、認知症による困りごとが増えていた。中でも近所の住民が心配したのが火の不始末。ガスコンロを使うのだが、火を点けていることを忘れてしまい、何度かボヤ騒ぎが起きてしまっていた。そこでショートステイやデイサービスを利用して自宅に一人でいる時間を減らしながら、特養への入居を待つことになった。

そんな彼女が突然席を立ち、談話室をウロウロし始めた。

COLUMN

MCIと早期発見

帝京大学医学部附属溝口病院
脳神経外科教授
中根 一 Nakane Makoto

1987年、東京大学医学部医学科卒業。寺岡記念病院脳神経外科、都立墨東病院脳神経外科などを経て、現在、帝京大学医学部附属溝口病院脳神経外科教授。1993年、ガレヌス賞（脳神経外科学会賞）受賞。日本脳神経外科学会専門医・代議員、日本脳卒中学会専門医・評議員、日本認知症学会専門医・評議員、日本脳神経外科認知症学会理事、日本脳ドック学会・評議員。

認知症の発症を抑えたり、進行を遅らせたりするためには、早期発見が必要である。そのためには、認知症の前段階で発見することが重要となる。軽度認知障害（MCI：mild cognitive impairment）は、認知症と正常の間に位置する認知機能の低下とされる。1995年にPetersonらは5項目の基準を提唱した（図）。

この基準で重要視されているのは記憶であり、この基準を満たすMCIは、健忘型軽度認知障害（amnestic MCI）と言われる。記憶以外の認知機能が低下し、認知症の基準を満たしていなければ、この状態もMCIと診断されることは知っておく必要がある。

MCIの10～15％が1年間に認知症に移行（コンバート）し、16～41％が正常に回復（リバート）すると言われている。早期発見により、この回復率を上げることが今後の課題である。回復率の振れ幅はMCIの診断基準による可能性もあり、MCIを医療・介護分野でどのように定義し発見するかが重要となる。

認知症の診断のために認知機能検査が行われる。臨床でよく使われる検査には、改訂長谷川式簡易知能検査（HDS-R）とミニメンタルステート検査（MMSE）がある。HDS-Rは30点満点のテストで20点以下が認知症レベルとされているが、MCIに関する基準はない。HDS-Rは記憶に関する項目が多いので、MMSEより健忘型MCIを検出できると筆者は考えている。

MMSEも30点満点のテストであるが、23点以下が認知症レベル、27点以下がMCIとされている。MCI検出に特化した検査として、日本

vol.2

幸せの国フィンランド便り

Raija Hashimoto
橋本ライヤ●外務省語学講師／社会福祉法人至誠学舎立川 至誠ホームスタッフ

ムーミンの他に日本でよく知られているフィンランドの話題はトナカイのそりに乗るサンタクロースと、ネウボラ（母子支援･ファミリー相談事業）のことではないでしょうか。

サンタはフィンランドではヨウルプッキというこどもたちをワクワクさせるおじいさんです。フィンランドのサンタのお話は、1917年の独立後すぐ始まったラジオ番組「マルクスおじさんのこどもの時間」から生まれました。その話とは北フィンランド･ラップランドにサンタは住んでいて、クリスマスに良い子にプレゼントを持ってやって来るおじいさんのお話です。でも悪い子にはお目玉という怖い面もあるのです。そのお話は新しい独立国家のこどもたちに希望と想像力を与えました。さらに、こどもたちに栄養豊かなオートミールをよく食べると健康になることを教えました。優しいおじいさんというより生活の先生でした。

実は独立したばかりのフィンランドでは悲しいことに1918年、白軍と赤軍の内戦が起こり、多くの戦死者を出し、その結果たくさんの孤児が生まれたことと関係していたのです。独立したばかりのフィンランドでは当時大流行をしていたスペイン風邪の影響もあると思いますが幼児の死亡率は1919年になんと13.5%にもなっていました。対策として栄養や衛生が特に問題でした。

その時いくつかの民間グループが子育て支

LIFE
科学的介護情報システム
高齢者介護における
実践・活用の意義と課題

東洋大学ライフデザイン学部准教授
高野龍昭 TAKANO Tatsuaki

VOL.2 LIFEによる「標準化」と「質の評価」

LIFEの開発における〝問題意識〟

LIFE（科学的介護情報システム）は、介護サービスによるアウトカム（成果）等について、科学的手法に基づく分析を進め、エビデンス（根拠）を蓄積し活用していく必要性があるということとともに、それをもとにしながら、個々の利用者が多様なサービスを比較しつつ、選択を行えるよう支援する必要性があるということを問題意識として掲げ（**＊1**）、開発が進められてきた経過がある。

この前者については、医療分野では長年にわたって取り組まれている「エビデンスに基づく医療（EBM：Evidence-Based Medicine）（**＊2**）のような取組をわが国の介護で可能にすることと言ってよい。また、後者は、欧米諸国の一部で取り組まれている「介護の質の評価指標（**＊3**）（QI：Quality Indicator）」の